鳴門教育大学研究紀要
第37巻　2022

徳島市津田中学校の防災学習倶楽部の部員が語る「ゆるさ」と「めりはり」

―― 防災学習の場に生まれるコムニタス ――

谷　村　千　絵*，根　本　淳　子**，光　原　弘　幸***

（キーワード：津田中学校，防災学習，防災教育，コムニタス）

1　はじめに

徳島市津田中学校は徳島市の沿岸部に位置し，南海トラフ地震による津波被害想定地域にある。津田中学校では17年にわたり防災教育に力を入れているが，なかでも防災学習倶楽部の生徒たちが地域の住民と連携して継続的に進めてきた防災活動は，この地域の防災啓発に大きな効果を上げており，メディア等で度々注目されてきた。また，全国の大会で表彰されるなど数々の賞を受賞している。地域住民のみならず大学等の研究機関や企業との連携もあり，徳島県内で「防災教育といえば津田中」といわれるほど，特筆すべき存在である。

本論文は，2019年３月21日に，津田中学校の防災学習倶楽部の部員である生徒と卒業生とともに行なった座談会についてその概要を示すとともに，部員たちの語りから津田中学校の防災教育が彼らにとってどのような意味をもち，何を得ていたのか，そして何がそれらを支えていたのか，を明らかにするものである。

ここで，研究分担と座談会を実施した経緯について説明しておきたい。第一著者である谷村は，座談会のファシリテーターと本論文の考察を担当している。第二著者の根本が座談会の発言データのKHcoderによる分析を行い，第三著者の光原は，学校への依頼と調整，当日の撮影と録音，データのテキスト化を担当した。

谷村と根本が津田中学校の防災学習倶楽部と関わった発端は，津田中学校で実践されてきたバーチャル避難訓練に関する共同研究への参画であった。バーチャル避難訓練は，光原を中心に開発，実施されてきたICT技術を用いる新しい避難訓練であり（三木ら2012，光原ら2017，光原2018，2021），2012年から徳島県内の複数の小中学校等で実践されている。バーチャル避難訓練は，避難経路を移動しながら，携行するタブレットに示される災害発生や避難時の様々なトラブルをバーチャルに体験するもので，各界で注目され地元のテレビニュースなどでも度々取りあげられている。津田中学校では，2012年から2019年まで（新型コロナウィルスの感染拡大が発生し2020年以降は中止となっている），毎年，夏休みに光原の指導のもと防災学習倶楽部の部員に行なわれてきた。2018年から教育設計・評価を専門とする根本，防災と教育哲学を専門とする谷村が加わり，光原と３人でバーチャル避難訓練についての共同研究を行なっている。

根本と谷村の二人は，2018年夏に津田中学校で光原の指導で防災学習倶楽部の部員に実施されたバーチャル避難訓練を参与観察し，その参与観察結果をふまえて，バーチャル避難訓練の成果と課題や今後の防災教育としての展開可能性について，光原と三人で検討した（津田中バーチャル避難訓練後ディスカッション2018年８月10日）。その際，ICTの技術的な改良点や教育実践上の要配慮事項等が検討課題として挙げられたが，他に，防災教育に質的研究が入ることの必要性が議論になった。防災学習倶楽部の部員たちにとって，防災活動はどのようなものとして受け止められているのか，彼らは防災活動を通じて何を学んでいるのか，どのように成長していくのか，何が成長させるのか，などの問いが浮上したのである。そこで，生徒たちの率直な意見を聞く機会として，学校に依頼して，同年度の終わりである2019年３月の春休み中に，生徒たちとの座談会を実施した。

*鳴門教育大学現代教育課題総合コース
**明治学院大学心理学部教育発達学科
***徳島大学理工学部

2　津田中学校の防災教育と防災学習倶楽部について

津田中学校の防災教育の始まりは，2005年に「総合的な学習の時間」で防災に取り組んだことにある。このころは，学校カリキュラムに「総合的な学習の時間」が導入されて数年の時期である。「総合的な学習の時間」のカリキュラムは学校がテーマを自由に設定でき，開設当初は文部科学省が例示した環境教育，情報教育，異文化理解教育などに取り組む学校が多かったが，津田中学校では「地域を知る」という取り組みをしていた。2005年は阪神淡路大震災から10年目の節目の年ではあったが，東日本大震災はまだ起っておらず，全国を見渡しても防災に取り組む学校はそれほど多くなく，徳島県内においても，南海トラフ地震の危険性についてほとんど周知されていなかった時期でもある。津田中学校は，総合的な学習の時間で始めた「地域を知る」という取り組みを一部発展させて，2005年から防災教育に取り組んだ。防災教育をいち早く取り入れ，また後述するように地域や大学と積極的に連携し，挑戦的な実践を開拓し，そして継続した点において，津田中学校は，徳島県内はもとより全国的にも防災教育の先駆的な存在となっていった。

井若ら（2015）によれば，2005年から10年間の間に津田中学校で行なわれた防災学習・活動の内容は，少なくとも15種類ある。たとえば，町内防災意識調査（夏休みアンケート調査）の実施，『津田・新浜地区　津波避難支援マップ』の作成・配付，幼稚園や小学校での出前授業，阪神淡路大震災追悼式典への参加，高齢者福祉施設での手作り非常食（ジャム）配り，バーチャル避難訓練，事前復興まちづくり計画の作成等々である。地域や異校種の学校，大学などの専門機関等とも連携しながら，実験的，精力的に様々な活動に取り組んだことが伺える。また，これらの活動には何年も継続されているものが多くある。

2014年からは，教育課程を離れた同好会としての防災学習倶楽部となり，生徒たちは機動力を活かして地域と密接にかかわる実践を継続して行ない，その姿はメディアでも度々報じられてきた。そして再び2017年から「総合的な学習の時間」の内容として防災教育が取りあげられ，教育課程の中でも取り組まれるようになった。第１学年から第３学年までの全生徒が，それぞれの学年の「総合的な学習の時間」において防災を学ぶ系統的な学習カリキュラムに加えて，防災学習倶楽部の活動も継続されているという状態が数年続いた。2021年からは，「総合的な学習の時間」での実施を継続しながら，有志の集まりであった防災学習倶楽部は，生徒会活動のなかのJRC（青少年赤十字）防災委員会に姿を変えて，より多くの生徒たちが所属して，防災活動を行なっている。

津田中学校の防災教育は，17年続いているというだけでも特筆すべきものであるが，地域と連携している取り組みはとくに高く評価されてきた。防災教育の実践が優れているとして，兵庫県等主催の「ぼうさい甲子園」で何度も受賞し，2010，2011年には「ぼうさい甲子園」のグランプリを連続受賞している。総務省消防庁等主催の第16回防災まちづくり大賞も受賞した。さらには，2018年に出版された中学校の道徳の教科書（光村図書）に，津田中学校の生徒が地域の一員として行動するエピソードが紹介されてもいる。

津田中学校が評価されてきたのは，地域と連携した防災学習の実用的な側面（助かるための防災）であるのはもちろんであるが，それだけではない。生徒たちが地域の一員として行動する姿がエピソードとして教科書に登場しているように，津田中学校の防災教育は，生徒たちの生き方に結びついた学び，すなわち人間形成の側面からも高く評価されている。

3　防災倶楽部部員との座談会について

防災倶楽部部員との座談会は，以下の要領で実施した。

日　時　　2019年３月21日（木）13：00－15：00
場　所　　徳島市津田中学校武道館
参加者　　津田中学校の防災学習倶楽部の部員15名および同倶楽部の卒業生である高校生４名
ファシリテーター　谷村　千絵
方　法　　半構造化インタビュー
記　録　　光原　弘幸
参　観　　防災学習倶楽部の顧問教員２名　次年度担当予定の教員１名

座談会は，武道館の畳の部屋で一同が車座になって行った。話しやすい雰囲気を作るためお茶とお菓子を用意

写真１　津田中学校防災学習倶楽部の部員たちとの座談会の様子

し，飲み食いしながらの座談会となった。開始前に決めていたことは，半構造化インタビューの方法をとり，生徒にとって津田中学校の防災教育がどのような意味があるのかを知りたいという，こちらの意図と限られた質問だけ用意して，そのあとの話の展開は基本的に生徒に任せる，という点である。

座談会は，前半が50分程度，10分休憩を挟んで，後半が１時間程度となった。ファシリテーターの谷村があらかじめ用意した質問は，以下の①，②の二つで，あとは話の展開にそって掘り下げていく形となった。

問い①津田中防災といえば○○？（○○に入る言葉を入れて説明して下さい。自己紹介を兼ねる。）

問い②津田中防災をやってきて，自分のなかで変わったことは？

座談会の記録は，ビデオ撮影とボイスレコーダーにより行なった。写真１は，当日の様子である。以下では，これらのデータをもとに座談会での大まかな内容と話の流れについて，前半，後半に分けて概要を示す。

３－１　座談会（前半）

はじめに，自己紹介を兼ねて，自分の名前，学年などと「津田中防災といえば○○」の○○に当てはまる言葉として思いつくものを尋ねた。○○は，事実でもイメージでもよく，理由についても問いかけて，一人ひとり詳しく聞いた。生徒たちが津田中防災と言えば？という問いに対して挙げたキーワードは表１のようになっている。

キーワードで複数，挙げられているのが，「楽しい」（４人），そして「団結」や「協力」（３人），「元気」「やる気」「体力」（３人），「地域の人」や「様々な年代の人との繋がり」（２人），「学年の差が関係ない」（２人），卒業生の参加を含めた継続（２人）である。

「楽しい」と答えた４人に，何の楽しさかを重ねて尋ねたところ，「一泊研修で打ち解ける楽しさ」（参加者９），「楽しく学べたことが記憶に残る（一泊研修の運営，見回りなど）」（参加者７），「話合いをするときに３年だけではなく，１，２年も集まって，上下関係も厳しくなく，楽しい」（参加者10）「夏のアンケートにいくときは，怖い人は怖いが，優しい人はお茶をくれたりして，気持ちも上がる，楽しい」（参加者）という回答があった。

また，参加者５の生徒に「継続」について何の継続か尋ねたところ，「毎年のアンケートの継続」という回答が返ってきた。アンケートとは，夏休みに生徒たちが地域を戸別訪問し，防災アンケートへの記入を依頼する取り組みである。

その他に防災学習倶楽部は，学校の部活と掛け持ち可能で，やる気のある人が集まってくること，１年時のみならず，2，3年時から参加する生徒も多いこと，面白そう，楽しそうという理由で集まってくる人が多いことが語られた。全員の自己紹介とキーワード紹介が終わったところで，谷村は，防災学習倶楽部に入って，イメージと違ったこと，意外だったことはないかと，さらに尋ねた。この質問に対して，表２のようなやりとりが続いた。

表１　参加者の学年とキーワード

参加者No.	学年	キーワード「津田中防災といえば○○」
1	３年	協力
2	３年	卒業生が引き続き参加して防災活動を続けている
3	３年	団結
4	３年	元気
5	１年	継続
6	高２	高校生よりもしっかり防災を取り組んでいる
7	高２	楽しい
8	高２	可能性
9	高２	楽しい
10	１年	学年関係なく楽しくできる
11	１年	自慢できる成績がたくさんある
12	２年	やる気
13	２年	楽しい
14	３年	すべてを気合いで乗り切っている
15	１年	協力
16	１年	体力
17	１年	地域との繋がりが大きい
18	３年	様々な年代の人と繋がれる
19	３年	年の差関係ないところ

表２　防災学習倶楽部に入って意外だったこと

参加者19：部活みたいにすごい上下関係があってっていうのをイメージしとったけど，入ってみたらゆるい。
谷　　村：ゆるい。
参加者19：団らんみたいな感じでなんかすごいなって。
谷　　村：意外にゆるいんだっていう感じ。
参加者１：堅苦しさがない（笑）
谷　　村：頷いている人が結構いる。堅苦しくないのに団結できるってすごいね。その秘訣はなんですか？
参加者２：メリハリが激しいから。
谷　　村：激しい。（笑）
参加者２：激しいとまでは言わんけど，普段の活動で，普段話すような日常の会話をしてても別に怒られないし。アンケートも，歩いてるときは関係ない話しながら歩いて，アンケートする時はちゃんとアンケートして。話し合いする時も決められた内容についてちゃんと話すけど，話がそれていくみたいな時もあるし。
谷　　村：（話の）脱線もありで，おしゃべりも当然ありで。その空気っていうのはずっと受け継がれてきてるのかな。今もそう？　ちょっと前もそうですか？
参加者７（卒業生）：わからん。
参加者６（卒業生）：まあ，そんなもんだったと思います。
参 加 者：（笑）

さらに理由を聞いていくと，津田中学校はほぼ全員が地元の一つの小学校から進学してくるので，９年間同じメンバーで気心が知れているという。性格などがお互いによくわかっているので，ゆるい雰囲気のなかでも，めりはりをつけられるリーダー的な役割がメンバーの中から自ずと生じているという話があった。

３－２　座談会（後半）

質問②の津田中防災をやってきて自分のなかで変わったことについては以下のようなことが語られた。以下，要約して紹介する。

参加者７　防災にかかわらず，授業等のグループ活動での行動力，発言力があがった。
参加者２　自分から動こうって思えるようになった。先輩が自分から動いている姿を見て。
参加者14　（上の意見に頷いて，さらに）家族全員防災に興味なかったけど，変わってきた。

アクティブさが増した，と思う人に挙手を求めたところ，19人中15人以上が挙手した。挙手しなかった生徒に何か変わったことがあるかと尋ねたところ，アクティブではないが，と前置きして，以下の回答があった。

参加者４　人と話すようになった。得意ではないが，コミュニケーション能力があがってきた。
参加者３　テレビで防災に関するニュースが流れたら見るようになった。

ここで，防災のニュースを見るようになった人に挙手を求めたところ，全員が挙手した。

参加者５　地震とかが怖いなと思っていたが，被害を防ぐ，軽減することができるので，いい意味で怖くなくなった。
参加者18　北海道や大阪で地震がおこって，前だったら他人事だったけど，今は自分にも関係があると想像できるようになった。震度３でも，大丈夫と思わず，意識が変わった。

ここで，災害を他人事と思えなくなったという変化があった人に挙手を求めたところ，全員挙手した。こうした変化があったのは，なぜなのか，その理由について尋ねたところ，次の意見が挙げられた。

参加者２　被災した人の話から，逃げ方などをきいて，災害に対して防げるんだなと考えて，具体的にこうしたらよいと想像できるようになった。
参加者９　こういう座談会とか，映画とかで，すごい考える。
参加者19　防災学習で学んだことを家族で共有できて，実際に防災グッズをさらに増やしたから。
参加者１　アンケート調査で，地域の人の話を聞いていくうちに，こういうこともあるのだと地域の人から学んだ。

家族で防災をするようになった，家族もかわったという人に挙手を求めると半数くらいが挙手した。毎年の夏休み中に地域を戸別訪問するアンケート調査の話が何度か出ていたので，この後はそれについて詳しくきいた。中学生が地域の家を一軒一軒訪ねるアンケート調査では，人とのかかわりで苦労しながら学んでいることが伝わってきた。３年間を通して，地域への理解が深まったり，相互に助け合って自分の変化を感じたりしており，達成感を得られていることがよく分かった。

4　KHcoder による発話分析と考察

座談会の発話について，KHcoder（樋口2020）による発話分析を行なった。なお，今回は半構造化インタビューの手法に基づいてはいたが，形式としてはインタビューというより座談会であった。ファシリテーターの谷村は，インタビュアーの役目ももちながら，時折，生徒たちの発言に触発されて，自分の経験や防災に対する考えを述べる場面もあった。それゆえ，純粋なインタビューのデータとしての分析は難しい。しかしながら，KHcoder の共起ネットワーク（データ中の言葉同士の繋がりをネットワークの形に表したもので KHcoder がおおよそ自動的に作成する）を踏まえて，対応分析を行なった図１の教員（谷村）と学生（生徒たち）の発話の対応分析の

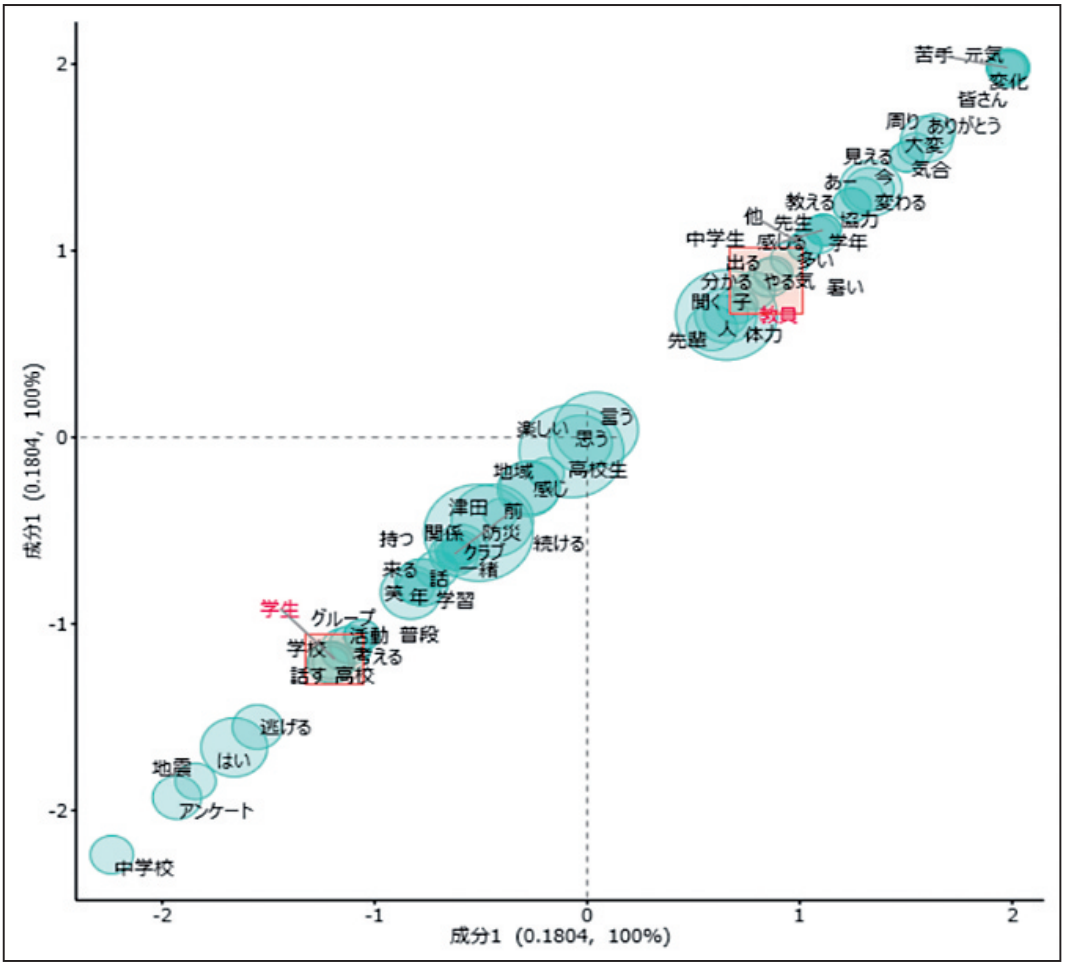

図１　教員・学生　対応分析

結果をみてみたい。対応分析というのは，データ中の言葉について，発語したグループとの対応を可視化するもので，グループの発語の特徴を示すことができるものである。図１では，学生（座談会に参加した防災学習倶楽部の部員たち）と教員（谷村）の２つで，それぞれに多かった発語が示されている。部員たちの発話に多かったのは，津田中や防災という名詞と合わせて，「活動」「考える」「話す」などの主体的な動詞であることが見て取れる。

さらに，図２は，生徒たちの発言の内容を模式的に示したものである。中央に津田中防災をおき，キーワードとして複数あげられたワードを楕円で囲み，その他の内容との関連性を示している。具体的な活動として名前が出てきたのが一泊研修とアンケート調査であった。（バーチャル避難訓練については谷村の発言をうけて実施時の夏の暑さがハードだという回答があった。）ここから見えてくるのは，生徒たちは，一泊研修やアンケート調査を通して，地域や他者との繋がりを感じていること，他方，年齢や学年にしばられないゆるい関係性があり，そのなかで協力や団結もあり，体力ややる気，気合いも必要であること，そして，卒業生が関わり続けていたり，アンケートは毎年行なっていたりと，活動の継続性にも特徴を認めている，ということである。楽しいというキーワードは，多くのワードと関連づけて説明されていた。

津田中防災の活動の基盤にあるものとして，「生徒たちの学年や年齢の垣根を越えた活動」を考えることができる（図２内の左上）。また，こうした活動のなかで，生徒たちが自分たちに得られたものとして感じていることに，様々なことに主体的になったこと，防災意識の高まりや，防災行動の変容を挙げることができる（右下）。

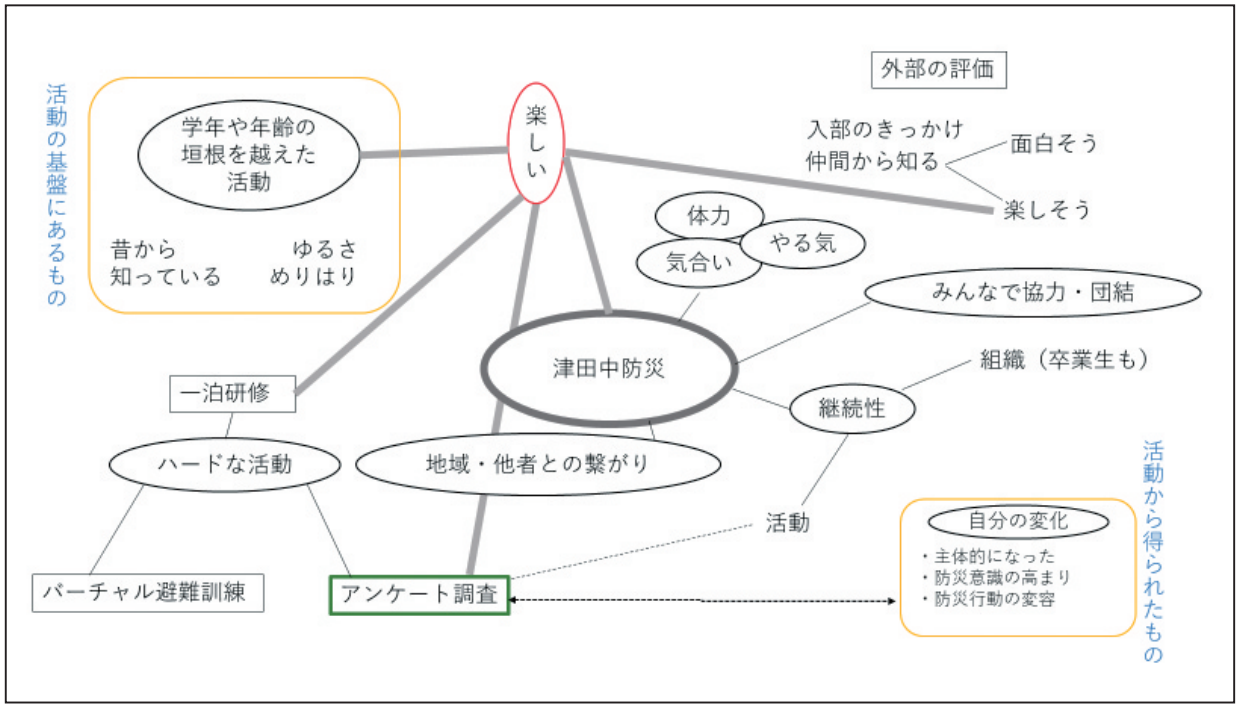

図２　生徒たちの発言による津田中防災に関するキーワード関連の模式図

5　考察　コムニタス概念から

先にも述べたように，津田中学校の防災教育は現時点で17年目になるという継続性に大きな特徴がある。また，津田中学校の防災学習に関する先行研究（井若ら2015）や数々の受賞における実践報告，メディアへの紹介を踏まえると，津田中学校は際立って地域との連携が充実している。座談会で生徒たちが語った内容からも継続性や地域との繋がりを感じさせる事柄は多く，これらのことをあらためて確認することができた。

とくに，地域との繋がりのなかで，生徒たちが成長をしていることがよく伝わってきたのが戸別訪問によるアンケート調査である。この調査では，地域の住民の方々の自宅やお店を訪ねるため，生活背景も含めて地域の方々に出会う体験となっているようだ。玄関先の犬に吠えられて怖かったとか，津波がきても店に商品があるから逃げられないと押し切られて閉口したとか，生徒たちの感じた緊張感，気後れや怖さが数多くあったことが語られた。素っ気なく扱われたときの無念さや，望外に優しくしてもらえたときの嬉しさ，地域の方々の防災意識が少

しずつでも変わっていっていることの手ごたえなど，１年目，２年目と経験を積み，次第に訪問戸数を増やしていけるようになるようである。地域の一員として地域の人々と関わり，それが生徒たちの自分自身の防災への関わり方はもとより，人との関わり方や地域への接し方など，自分の生き方にも繋がってきていることが想像できた。

そして，座談会では「先輩後輩の上下関係がないからいい」という発言が何度かあり，とても印象に残った。KHcoder による分析とその考察では，「話す」や「考える」といった主体的ワードが生徒のなかで中心的であった。先生や先輩，地域の人におもねることなく，他者とかかわりながらも基本的姿勢としては「自分で」という構えを大切にしていることが自然と表れていた。そうした「ゆるい」人間関係の背景には，小学校時代からお互いによく知っているメンバーであることが，大きな影響を与えているということだった。

しかし，このように生徒たちが挙げる，学年や年齢の垣根を越えた「ゆるい」人間関係のありようは，「防災学習倶楽部に入って意外だったこと」として挙げられている点にも注目すべきだろう。上下関係のない「ゆるい人間関係」は，津田中学校区の中学生ならだれでもが享受している当たり前の状況ではない，ということである。

中学校ともなれば，一般には自意識の芽生えもあり，人間関係に緊張を感じやすい発達段階にある。教師からの対応は小学校までとは異なって指導的な側面が強調されやすく，学校という集団生活の中では，序列を伴う組織的な行動が一層重んじられ，年長者への礼儀も教えられていく。地域でともに育ち培ってきた「ゆるい」人間関係が，学校生活の諸場面において組み直されていく時期でもある。こうしたことは，津田中学校にも当然生じるものであり，だからこそ，生徒たちは防災学習倶楽部での「ゆるい」人間関係を「意外」と感じているのではないだろうか。

津田中学校の防災学習倶楽部の活動では，学年や年齢，あるいは性別，勉強やスポーツの序列から自由になり，しかし「めりはり」をつけて，やるときは「気合い」「体力」「やる気」で頑張る，というダイナミズムがあることをうかがい知ることができたが，これが津田中の防災学習倶楽部の基盤となって支えていると考えられる。このような「めりはり」をともなう「ゆるさ」という場のダイナミズムは，何によって生まれているのだろうか。

この点について，参照したいのが，コムニタスという概念である。コムニタスというのは，文化人類学の概念（ターナー1976）で，教育哲学の領域でも注目されてきたものである（藤川2003，高松・森2019他）。文化人類学的には，通過儀礼の重要な段階に表れる，非日常の聖なる空間における人間関係の特徴を示すものであり，日常を超越する存在を前にして，参加者が日常世界の属性から自由になること，俗を捨てて平等になる関係性のことを指す。コムニタスは，様々な通過儀礼における人間の成長の節目に，また巡礼などの宗教的修行の重要な過程にも見られるものとされている。

日本社会が近代化される前の共同体の産育習俗には，今はもうほとんど見られないが，若者宿，娘宿，あるいは産屋など，若者や娘，あるいは産婦らが籠もる特殊な場があった。これらの場においても，「俗」から離れたコムニタスな関係性があったと考えることができるという（藤川2003）。こうした場所は，今日でいう道徳教育を含んだ，重要な人間形成の機能を果たしてきたと考えられている。

自然（災害）という人間を超越した相手につきあわざるをえない防災には，コムニタスな関係を，私たち人間にもたらす可能性がある。大きな自然災害は，あらゆる年齢の，あらゆる属性の人に，等しく降りかかるからである。災害に向き合って防災の活動を進めることは，日常的な所属や経験の差，序列や年齢を超えて，コムニタスな関係性のなかで活動することを意味するといえる。

このことから，津田中学校の防災学習倶楽部の部員たちの経験について考察してみたい。中学生にとって地域の住民の方々は，年長者であるとともに，地域のことをよく知る経験者である。また同じ中学生の先輩も年長者であり経験者である。しかし，自然災害については，同じように向き合う一人の仲間であり，防災意識をもっていない人は，年上であれ，年下であれ，働きかけるべき対象である。年齢や学年にとらわれない人間関係がそこに生じる。自由で，日常の役割や関係上の制約から離れ，「ゆるさ」をもった人間関係である。

繰り返しになるが，こうした「ゆるさ」のある関係はコムニタスによって，つまり，自然災害という「日常を超越する存在を前にして，参加者が日常正解の属性から自由になること，俗を捨てて平等になること」によって生じていると考えられる。なお，かつては学校が，児童生徒の家庭や地域の習俗を超越する価値観によって形成されるコムニタスであった（藤川2003）。しかし，コムニタスは時間の経過とともに関係者の再序列化を生み，コムニタスでなくなっていくというジレンマを抱えるものでもある。近代産業化によって社会全体が学校の価値を取り入れ，教育的な家庭が普遍的な価値を持つような今日の社会おいて，学校は世俗化し，世俗を超える価値を児童生徒に提示する場所ではなくなってきている。このような経緯をふまえて考えるならば，津田中学校では，

自然災害に向き合う防災学習を通して，学校に再びコムニタスがもたらされている，と見ることが出来よう。

そして，防災活動を進めていくとき，「ゆるさ」のある人間関係の中でこそ，状況の必要に応じて「めりはり」のあるリーダーシップが生まれてくる。人々の関係性が創造的にその都度，くみ上げられている，といってもよいかもしれない。「めりはり」がありながら「ゆるい」，という津田中学校の防災学習倶楽部のダイナミズムは，こうして生じているのではないだろうか。

津田中学校の防災活動をとらえるキーワードや，キーワード以外の語りの部分でも「楽しい」という言葉が多く使われたことも頷ける。自らが参加する創造活動は，人にとって根源的に楽しいものだからだ。そのような創造的な場で，「ゆるさ」と「めりはり」の両方をもって活動しているからこそ，津田中学校の防災活動は続いてきた。中学生たちは，津田中の防災活動から防災意識が高まったり，防災行動の増加という変容があったりしただけではなく，アクティブさ(主体性)をもって周囲にかかわるという，自分の生き方に繋がる学びを得ていた。人間の成長の節目や道徳教育を含む重要な人間形成の機能をもつコムニタスな人間関係があるからこそ，といえるだろう。学校は，かつて，こうしたコムニタスから生まれる「ゆるさ」と「めりはり」による創造的な学習が可能な場所であった。防災学習は，学校に本来的な人間形成につながる学びを取り戻す契機とも考えられるのかもしれない。

また，こうしたとらえ方は，津田中学校と津田地区の防災活動を，より汎用性のあるものとして捉えるという意味において有益である。「ゆるさ」と「めりはり」のある人間関係は，具体的には津田の人たちによって編み上げられているものであるが，しかし，コムニタスという見方をもつことで，それらが津田中学校，津田地域だからできたものではなく，自然災害に向き合う防災学習として生まれるもの，より汎用性のあるものとして理解できるからである。

津田中学校の防災教育は，何度も述べるように，優れた実践として高い評価を得ていて，その成功の秘訣はともすれば地域との繋がりにあるように語られる。そして，津田中学校や津田という地域の何か特別な魅力が引き立てられることで，他の学校や地域で同じような防災活動をするのは難しい，という考えに行き着いてしまう。優れた防災教育の実践はあっても，なかなか広まらず汎用性を持ち得ないという課題は防災教育においてよく指摘されることであるが，それは実践のとらえ方が表面的なものにとどまっていることにも原因があるのではないだろうか。本論文では，座談会の発話分析から津田中学校の防災学習倶楽部の部員たちの学びを牽引していると考えられる普遍的要因として，年齢や学年を超えた，「ゆるさ」と「めりはり」のダイナミズムのある場があることを見出し，文化人類学のコムニタスという概念を用いて考察を行った。この普遍的要因は，コムニタスをもたらす防災学習によってこそ学校に再帰的にもたらされたものであり，人間形成の機能をもつ学習の場の特徴といえるだろう。

6　おわりに

津田中学校の防災学習倶楽部の部員との座談会を通じて，人智を超える自然と自分たちもつきあう，という姿勢からコムニタスがもたらされ，それによって「ゆるさ」と「めりはり」のダイナミズムのある場が生まれていることが見えてきた。こうしたことが，他の優れた防災活動に共通する，より汎用性のあるものであるかどうか，今後，さらに明らかにしていきたい。

また，今回の座談会の考察を踏まえて，バーチャル避難訓練の充実に向けて何が示唆されるかを検討することも，本共同研究の課題に挙げておきたい。これまでのバーチャル避難訓練では，モラルジレンマの状況をシナリオに組みこんできたが，2018年と2019年（谷村のみ参与観察）ともに，津田中学校の訓練と部員たちによる振り返りでは，モラルジレンマ状況（たとえば，急いで津波から避難している途中，負傷した高齢者を担架で運ぶかどうか）への対応に関して，無関心，回避，否定といった心理的反応はほとんど見られず，難しさを素直に認める意見や，具体的な対応策を考える意見が見られた。また2019年の時は，どういう判断をするにせよ，迅速な判断が重要だというメタ認知レベルでの振り返りもなされていた。こうした高度な振り返りが部員たちにできていたことにも，コムニタスを鍵とした，「ゆるさ」と「めりはり」のある場のダイナミズムが関係しているといえるかについて，今後明らかにしていきたい。

最後に，学校防災という観点からも付言しておきたい。座談会で当時の部員と卒業生によって語られたのは，津田中学校の防災全体というよりも，防災学習倶楽部の活動が中心であったことを忘れてはならない。津田中学校で同好会としての防災学習倶楽部が活動した2014年から2020年までの７年間は，2004年から全国に先駆けて防

災に関して行なわれた先進的な取り組みが積み重なって充実していた時期，興味関心のある部員と教員で活動を活発化させながら，2017年からは「総合的な学習の時間」で学校全体としても防災に取り組まれた時期であり，学校外の多様な組織と連携し，新しい実験的なことにも次々と挑戦できた時期と位置づけることができる。

この黎明期に，先見の明のある教員の自発的意志や創意工夫が，津田中学校の防災学習倶楽部の活動を支えていたことは想像に難くない。そして，顧問の教員の交代がありながらも同好会である防災学習倶楽部の活動が何年も継続したのは特筆に価する。他方，活動が実験的で，創造的であった分だけ，顧問教員に求められる力量やエネルギーにも相当なものがあったことも予想できる。

現在，津田中学校では防災学習倶楽部での活動を，総合的な学習の時間やJRC防災委員会（生徒会活動）に組み入れ，防災を引き継いでいくための試行錯誤がなされているということである。学校防災のこれからを考えるとき，一部の教員に防災教育が委ねられるという状況を超えて，新しい形を作っていくことが求められている。というのも，東日本大震災，中でも大川小学校をはじめとする学校の被災を踏まえた多くの反省や，近年多発する大規模自然災害を受け，ここ10年の間に，学校防災に関する考え方，あり方が大きく変わってきているからだ。文部科学省の指針はもとより，徳島県教育委員会が発行する『学校防災管理マニュアル』においても具体的に示されているように，今日，学校教員には，職務規程を明確にした上で，防災管理と防災教育の二つの柱で教育課程の中でしっかりと防災を行なっていくことが求められている。一部の教員の熱意やボランティア精神，開拓精神によって防災に先駆的に取り組まれてきた状況から，全ての学校教員が防災の基本を理解し，指導できる状況になることが目指されているのである。現場においては未だ課題が多いが，先進的な津田中学校のような実践から学び，そして，これからの学校防災を新たに創造していく時期に来ていることは確かである。

本論文では，津田中学校の防災学習倶楽部の部員たちとの座談会から，コムニタスを鍵とした「ゆるさ」と「めりはり」のある場のダイナミズムが防災活動を支えていたことを明らかにした。この知見を，これからの学校における防災の実践にいかに落とし込んで行けるのか，という点については稿をあらためて検討したい。

謝　辞

津田中学校の防災倶楽部に所属する生徒のみなさん，卒業生のみなさん，そして先生方のご協力によって，座談会を開催することが出来ました。ここに感謝の意を表します。なお，本研究は，科学研究費補助金18H01054の助成を受けたものです。

文献，注（引用文献等）

井若和久・上月康則・杉本卓司・山中亮一・渡曾健詞・森潤也・佐藤康徳（2015）「徳島市立津田中学校での10年間の防災学習・活動とその地域波及効果」『土木学会論文集』B 2 （海岸工学）Vol. 71. No2, I_1621-I_1626.

小柳正司（2017）『教育原論の試み ― 人間形成の歴史と思想』あいり出版

高松みどり，森征樹（2019）「どのように外国籍の子どもを日本社会（学校）に統合するのか：そのアイデンティティと学習権の法的整備に着眼して」『実践学校教育研究』大阪教育大学（22），pp. 27-36.

徳島県教育委員会『学校防災管理マニュアル』（2021）

徳島市津田中学校（2021）『令和２年度第64回徳島県中学校「総合的な学習の時間」教育研究大会研究紀要』

藤川信夫（2003）「不登校・ひきこもり」『人間と教育を考える ― 教育人間学入門』田井康雄編，学術図書出版社，pp. 13-21.

中学校道徳教科書（２年）（2018）『中学道徳きみがいちばんひかるとき』光村図書出版（東京）

V.W.ターナー『儀礼の過程』思索社，1976

樋口耕一2020『社会調査のための計量テキスト分析 ― 内容分析の継承と発展を目指して ― 第２版』ナカニシヤ出版

三木啓司，角川隆英，宮下純，光原弘幸，小西正志，井若和久，上月康則（2012）「実世界Edutainmentによるバーチャル避難訓練 ― 南海地震津波を想定した徳島県徳島市津田地区の場合」『日本災害情報学会第14回研究発表大会予稿集』pp. 34-37.

光原弘幸，井上武久，山口健治，武知康逸，森本真理，上月康則，井若和久，獅々堀正幹（2017）「考えさせるICT活用型避難訓練の実践」『教育システム情報学会研究報告』Vol. 31, No. 7, pp. 65-72

光原弘幸（2018）「ICT 活用型防災教育システムの現状と展望」『教育システム情報学会誌』Vol. 35, No. 2, pp. 66-80.
光原弘幸（2021）「ICT を活用した避難訓練」『教室の窓』東京書籍 Vol. 64, pp. 20-21.

“Informality” and “Balance” Discussed by Members of the Disaster Prevention Learning Club at Tsuda Junior High School in Tokushima City
— Communitas Born in the Field of Disaster Prevention Learning —

TANIMURA Chie*, NEMOTO Junko** and MITSUHARA Hiroyuki***

This paper presents a summary of discussions between students and graduates of the Disaster Prevention Learning Club of Tsuda Junior School and analyzes their speech using KHCoder. Members said that the activities of the Disaster Prevention Learning Club encouraged disaster prevention skills and developed their abilities to take a proactive role in things; the “informal” human relations and “balanced” leadership across ages and grades were the basis of their disaster prevention activities which made it enjoyable for many club members. In addition, this study examines the dynamism of the field with “informality” and “balance” using the concept of communitas under cultural anthropology. Communitas is the characteristics of human relationships when new relationships are created by removing everyday relationships. They can occur in disaster prevention places where people are confronted with natural disasters that exceed human wisdom. The dynamism of free “informality” and “balance” in the Disaster Prevention Learning Club at Tsuda Junior High School are hypothesized to be generated by Communitas. Through such consideration, this study suggests that good disaster prevention activities can be understood as a peculiarity of schools and communities, but also as general activities.

*Basic Human Science for Integrated Studies, Naruto University of Education
**Department of Education and Child Development, Faculty of Psychology, Meiji Gakuin University
***Faculty of Science and Technology, Tokushima University